

青年 岸清一の姿

松江のさいかまち雑賀町で生まれ、大日本体育協会の会長として東京オリンピックの誘致に尽力した岸清一。きしせいいち東京大学の学生であったころからスポーツ、特にボート競技にのめりこんでいたことが伝記『岸清一伝』に記されています。

今回のミニ展示では、明治19年(1886)に松江から上京し東京農林学校(東京大学農学部の前身)に入学した学生柳多平之助やなぎたへいのすけが松江の父へ送った近況報告を紹介します。この手紙は、当時の若者がどのような道すじで上京したのか、岸清一が他の学生からどのように見られていたのかを知り得る貴重な資料です。当時の学生が見た若き日の岸清一の姿を紹介します。



帝国大学ボートレースで優勝した法科大学のクルー
後列左端が岸清一

明治22年(1889)4月、『岸清一伝』より



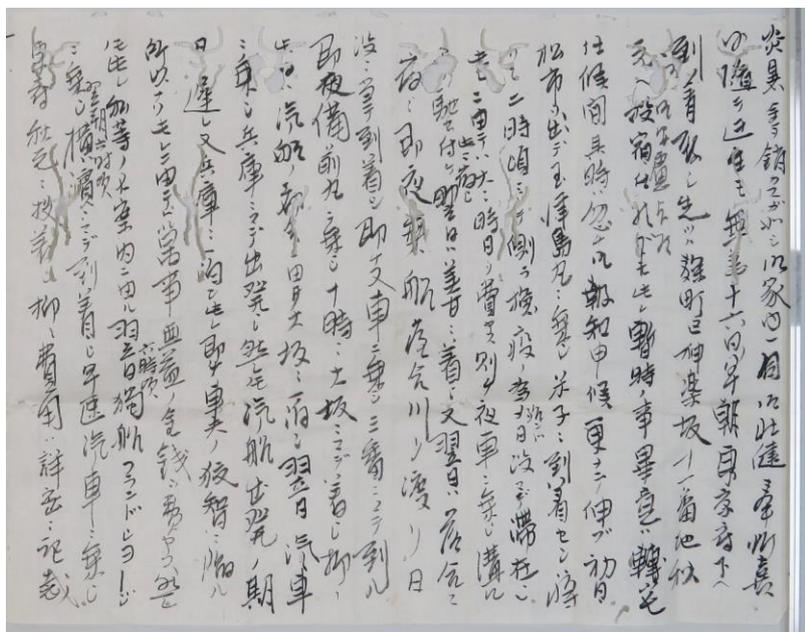
帝国大学卒業後、代言人(弁護士)事務所を開業する
右は母親のゲン

明治22年(1889)7月頃、『岸清一伝』より

岸 清一 (1867~1933)

岸清一は松江中学を首席で卒業し、明治16年(1883)に上京して東京大学法科大学に入学する。学生時には勉学のかたわら、帝国大学運動会の委員として組織体制の指導、選手として関わっていた。これらの経験や生涯の仕事となった弁護士としての豊かな国際経験を買われて大日本体育協会の会長となる。岸は三度のオリンピックに役員として参加し、近代日本のスポーツ発展に寄与した。

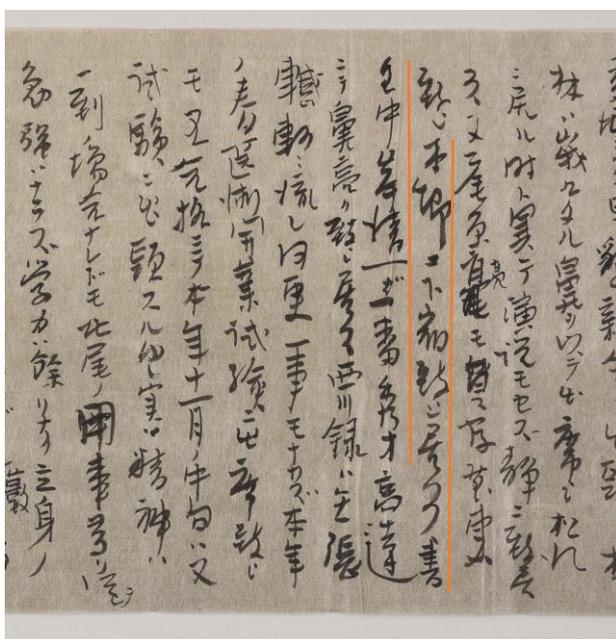
明治十九年(一八八六)八月十六日、
東京への到着を知らせる



柳多平之助は東京農林学校入学のため、汽船に乗り
松江を立つ。一日目は溝口で宿泊、二日目は美甘で宿
泊、三日目は落合で宿泊する。四日目は落合から船に
乗り岡山港まで行き、大阪行きの汽船に乗る。五日目
の朝に大阪に到着し兵庫まで汽車で行きそこで宿泊。
六日目の朝に汽船に乗り、翌七日目の朝に横浜に到
着、汽車で東京へ行き滞在地の神楽坂に到着した。
岸清一は三年前、若槻禮次郎は二年前に上京してい
る。同様の行程で上京したのであろう。

柳多平之助書状(個人蔵、当館寄託)

明治二十年(一八八七)十一月一日、
下宿生の中で岸清一が一番秀才

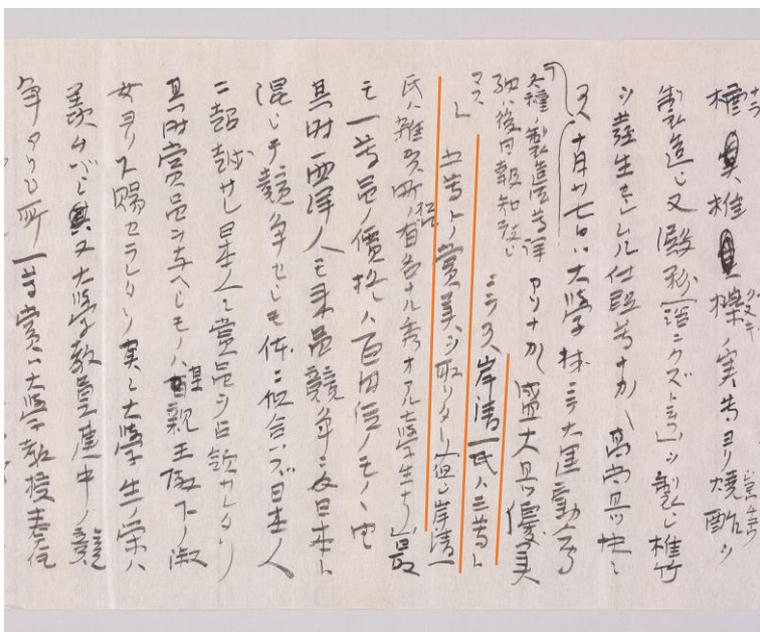


帝国大学の大運動会や出雲大懇親会の開催等の近
況を、父である三谷権大夫に知らせた書状である。こ
の中で柳多平之助は「本郷二下宿致シ居候書生中、岸
清一が一番秀才」と述べている。

柳多平之助は約二十年前まで松江藩家老であった
三谷家に生まれ、同じく家老であった柳多家の養子と
なった人物である。一方岸清一は松江藩の足軽の子で
あった。江戸時代の家格の差は一切感じられず、同じ
学生として岸を秀才であると評価している。

柳多平之助書状(個人蔵、当館寄託)

明治二十一年(一八八八)十一月一日、
大運動会で三等となった岸清一



十月二十七日に開催した帝国大学の運動会につい
て、父に知らせた書状である。この中で柳多平之助は
「岸清一氏ハ三等ト五等トノ賞美ヲ取りタリ、但シ岸
清一氏ハ松江雑賀町ノ有名ナル秀才アル大学生ナリ」
と評している。岸清一の学生時代については、ポート
での活躍は『岸清一伝』等に記されているが、この手
紙にから大運動会で上位入賞するような運動にも秀
でた学生であることがわかった。また、前年の手紙で
も岸清一を「秀才」と評しており、文武両道の学生だ
と周囲から認められていたのであろう。

柳多平之助書状(個人蔵、当館寄託)